

2017年度点検・評価シート

※下記の指摘事項、課題を踏まえて、Ⅱ点検・評価 Ⅲ【達成目標】欄を記述してください。

(進捗状況を【現状説明】に記述し、必要に応じて新たに【目標】を設定する。)

<p><b>2016年度大学評価（認証評価）結果指摘事項</b></p> <p>&lt;概評&gt;</p> <p>・「活動への参加について学部・学科また個々の教員間で意識の差が大きい」ことを自己点検・評価しており、さらなる改善を期待したい。</p>
<p><b>2016年度外部評価委員会指摘事項</b></p> <p><b>【特筆すべき事項】</b></p> <p>貴大学の特色を活かして、個々の教職員や組織体によって多岐にわたる社会貢献・国際貢献活動が行われていることは評価できる。</p> <p><b>【改善提言】</b></p> <p>多くの社会貢献活動等に関して、一定の成果は見られるものの、その活動の検証が組織的に十分行われていない。これらの活動を大学としての強みに結び付けられるよう、大学全体としての活動の集約と次年度以降の計画への反映が求められる。また、これらの活動は組織的にホームページに掲載し、積極的に公表することも必要と思われる。</p>
<p><b>前年度からの課題</b>（2016年度点検・評価シート IV次年度への課題 より転記）</p> <p>なし</p>

I 評価項目・担当部局

対象部局	文学研究科
評価基準 8	社会連携・社会貢献
点検・評価項目(2)	8-2 教育研究の成果を適切に社会に還元しているか。
評価の視点	教育研究の成果を基にした社会へのサービス活動
	学外組織との連携協力による教育研究の推進
	地域交流・国際交流事業への積極的参加
点検・評価項目(3)	8-3 社会連携・社会貢献の適切性について定期的に検証を行っているか。
評価の視点	責任主体・組織、権限、手続きを明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させているか。

II 点検・評価 対象期間は2016年4月～2017年5月までとする。(教員数、学生数などのデータの基準日は2017年5月1日)

【点検・評価項目ごとの現状説明】

8-2	文学研究科として、教育研究の成果が適切に社会に還元されているとは言い難い。
8-2	<p>以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。</p> <p>(1) 教育研究の成果を基にした社会へのサービス活動について【○】</p> <p>具体的事例：文学研究科自体というよりは、5専攻各々の教員が、地域連携センター主催の公開講座講師を務めている。</p> <p>(2) 学外組織との連携協力による教育研究の推進について【○】</p> <p>具体的事例：文学研究科自体というよりは、5専攻各々の教員が、地域連携センター主催の公開講座講師を務めている。</p> <p>(3) 地域交流・国際交流事業への積極的参加について【×】</p> <p>具体的事例：</p>
8-3	社会連携・社会貢献の適切性について、文学研究科委員会等において検証をされているとは言い難い。
8-3	<p>以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。</p> <p>社会連携・社会貢献の検証に関する責任主体・組織、権限、手続きについて【○】</p> <p>具体的事例：5つの各専攻協議会及び文学研究科委員会において検証を行っている。</p>

【効果が上がっている事項】

8-2	
8-3	

【改善すべき事項】

8-2	文学研究科として、教育研究の成果をいかなる形で社会に還元可能か、その方法についての検討を開始する。例えば、地域連携センターとの公開講座の共同開催や、人文科学研究所との合同発表会を公開とするなどの検討を開始する必要がある。
8-3	社会連携・社会貢献の適切性について、文学研究科委員会において定期的に検証を行う必要がある。大学主催の地域連携センターにおける公開講座等で、社会還元可能かどうか、また、その他の方法について検討する。各専攻協議会において検討した結果を文学研究科委員会に報告し、検証していく。

Ⅲ 【達成目標】 目標の進捗状況は、「S：完全に達成」「A：概ね達成」「B：やや不十分」「C：不十分」で、評価する。

達成目標		目標達成の指標となるもの	評価				
			2014	2015	2016	2017	2018
中期目標 (2014～2018)	8-2 文学研究科として、教育研究の成果を社会に還元していないので、その方法について検討し、教育研究の成果を適切に社会に還元する。	教育研究の成果を適切に社会に還元している。			S	A	
	8-3 文学研究科として、社会連携・社会貢献を実施し、その適切性についての定期的な検証を行う。	文学研究科として、社会連携・社会貢献を実施し、その適切性についての定期的な検証を行っている。			B	A	
16年度目標	8-2 文学研究科として、教育研究の成果をいかなる形で社会に還元可能か、その方法についての検討を開始する。	大学主催の地域連携センターにおける公開講座等で、社会還元可能かどうか、また、その他の方法について検討する。			S		
17年度目標	8-3 文学研究科として、社会連携・社会貢献を実施し、その適切性についての定期的な検証を行う。	文学研究科として、社会連携・社会貢献を実施し、その適切性についての定期的な検証を行っていることが確認できる。				A	

Ⅳ 評価専門委員会所見

8-2 【現状】 文学研究科 5 専攻の個別教員が公開講座講師を務めているという記述がありますが、個々の教員の活動に頼るだけでなく、やはり文学研究科として、教育研究成果の社会への還元、学外組織との連携協力・教育研究の推進、地域交流・国際交流事業への積極的参加などの検討・速やかな取り組みが望まれます。 【現状】において、「教育研究の成果が適切に社会に還元されている」とは言い難い。」としつつS評価となっています。還元されているのであれば現状説明に記述してください。

Ⅴ 所見への対応

8-2 【現状】 英文学専攻では、まとまった形での学外組織との連携・交流・社会的参加は行っていないが、他大学大学院との交流、研究雑誌「ポローニア」の継続した刊行等を行っている。今後は、地域交流・国際交流等への参加を検討する。  
 8-2 【現状】 文学研究科所属教員複数が、2017年9月30日開催の島崎藤村学会全国大会における実行委員会に属し、挨拶、研究発表、シンポジウムに参加する。今回の大会実行委員長は本研究科委員長でもある。学会自体、一般の藤村文学愛好者の会員比率が高く、二日目は川越市における臨地研究が予定されている。そこで案内人を務められる方は川越在住会員であり、研究発表もされる。全国各大学からの参加者が見込まれ、毎年とはいえないものの、このように一つの大きな全国組織の学会大会が開催されることによって、「社会への還元、学外組織との連携協力・教育研究の推進、地域交流」などの実例にも成り得ると言えよう（大東文化大学・川越市・川越市教育委員会が後援）。大会の成果は、学術雑誌に掲載される。

Ⅵ 次年度への課題

文学研究科として、当該課題の検討を引き続き行う。

本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

B8-1 大東文化大学の基準別基本方針 HP  
<http://www.daito.ac.jp/information/about/basicpolicy.html> <既出> B1-5

〔追加資料〕